慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	中川正左著 鉄道論
Sub Title	
Author	増井, 幸雄
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1921
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.1 (1921. 1) ,p.153- 156
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19210101-0153

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

以、國民産業の一として海外屬領地との關係に於て、並に國防との關係に於ての海運の地位をば内外各國の例を以て説明して居る。次に第二章は「我國の經濟と海運」と題し人口問題を解決する爲には結局商工立國主義によらざるべからず、その爲めには又海運の發達は絶對的に必要なることを論じ、猶ほ本邦の海運は現時の發達程度を以て滿足すること能はざることを述べて居る。そして第三章に於ては海運經濟の内容と構成とを一言して緒論を終つて居る。次に船舶論は著者の見によれば海運經濟論の本論を構成すべき海運經濟の原理と政策との研究に對する豫備知識として必要なるものであつて、第一章に於て船舶の意義と船舶論の内容とを示し、第二章に於ては「船舶の構成部分」と題して船體及艤裝の各部分や船體の進水に至るまでの造船手續を説明し、第三章に於ては「船舶能力」の題下に總噸數、純噸數の如き容積上の能力と、排水噸數、重量噸數の如き重量上の能力と、速力との三者並に是等に關係せる事項を説明して居る。第四章は「商船の發達」の研究に宛てられ、丸木舟の昔からタービン汽船の今日に至る迄の船舶構造上の發達の歴史、木造船よりコンクリート船に至る迄の造成材料上の發達の歴史、櫓櫂時代より電氣推進に至る推進方法發達の歴史、木船時代より鋼船の今日に至るまでの積載力及び速力に於ける能力の發達の歴史、及び船舶能力の增加と收益力の增加との關係等を述べ、第五章は「船舶の種類」と題して右述べたる發達を經て來た船舶をば技術的、經濟的、法律的の見地からして之が分類説明を試み以て卷を終つて居る。

著者の論構は頗る組織的である、そのことは緒論第二章に於て本邦の經濟と海運との關係を述ぶるに當り、本邦の人口趨勢から食料品供給狀態に至るまで本邦の經濟狀態をば或は過ぎたりと思はるゝまでに綿密に論じ之と海運との關係に就ては僅かに數語を費すのみにして以て讀む者をして兩者の關係を了得するを得しめて居るの點に於て最も著しく現はれて居る。又本書は頗る readable である、このことは船舶論に於て著しい。蓋し船舶論は著者の言の如く海運經濟研究の豫備知識として必要なるものなるにも拘らずその研究は兎角閑却され勝ちである、それは實際從來の海運論に於ける船舶の説明そのものが餘りに技術的機械的にして讀者の興味を惹くに足りないの憾があつたことにもよるであらうが、經濟を修める者にとつては技術の事は分り惡いものとして始めから決め込んで居るといふ事情もないではない。然るに小島助教授の船舶論は叙述は簡にして要を得て居り、文章は分り易い口語體、之を助くるに數十の寫眞版やレプロダクションや統計の挿入を以てして居る、以て前者の憾なからしめ後者の「不喰嫌ひ」の感情を驅逐するに充分である。紹介者は海運に關する邦文著書の少ない折柄此の好著の公刊を喜び、第二卷以後の速かに續刊せられむことを希望するものである。（增井幸雄）

中川正左著「鐵道論」

鐵道講習會發行
定價金二圓五十錢

本書は「現今の我が國有鐵道は果してその本領を發揮しつゝありや否や、その運賃制度は國有鐵道として果して妥當なりや否や、更に國有鐵道の經營は私有鐵道の範を以て任ずるの特色ありや否や等の疑問に答へむと欲」して「主として我が國有鐵道の眞相を闡明し之を以て獨逸の國有鐵道と比較せんと」するの目的を以て、鐵道

省の事務に從事する傍ら東京帝國大學商業學科の委囑によりて試みたる「講義案を基礎として實地及び學理の双方より觀察したる事項を公表」したものである。本文菊版二百六十餘頁、その論ずる所は鐵道の觀念、經濟上に於ける鐵道の性質、鐵道の種別、鐵道管理組織、鐵道會計、運輸營業、鐵道勞働の七章で、終りに參考書を列記したる一章と各國鐵道管理組織の一覽表及び營業費に關する統計並に貨物旅客に要する營業費分割方法の說明とを添えてある。通讀した所、從來の邦文鐵道論の著書に於けるよりも學理的の所論が比較的少なくして實際の叙述が多く、實例を擧ぐるに當つては外國のそれよりも本邦の鐵道に之を求めること多く、經濟論に止めずして主として本邦の法規を參照し或は獨逸のそれを引用して鐵道の實相を描出するに力められた點などが眼に着くのであつて、例へば「鐵道經濟論」とでも命名された書物を讀むといふよりも「日本鐵道論」とでも命名されたる書物を讀んで居るやうな感じがする。外國の著書にありては多く實例を各自國の鐵道にとつて居るから理論を知ると同時にその國の鐵道の實狀が多く分かるに反し、我國從來の著書には外國の實例の引用が比較的多くして理論は分つても日本の鐵道の實際が殆んど分らぬといふ憾みがないでもなかつたが、此の憾みは本書に於ては感せられない。著者は鐵道の專門家であるから本邦鐵道の實狀の說明は殆んど遺憾なき程に盡されてある、然し實地說明の點に强いだけに同時に理論の點に於て弱きを免れざるの感じがする。例へば著者の言によれば、我が國有鐵道がその本領を發揮しつゝありや、その運賃制度が國有鐵道として妥當なりや等の疑問に答へむとするが著者の目的であるのに、本書に於ては國有鐵道なるもの丶本領如何の說明もなければ從て又國有鐵道として運賃制度が妥當なるや否やの批判も與へられて居らない、尤も個々の點に就て見れば例へば一等車運轉の制限とか、途中下車の制限とか、通行稅徵收方法上に於ける不合理とか或はその他の點に就て辯護や批評等を試みて居らるゝことは事實であるが、まだ〳〵獨望の感なきを得ない。又全卷の約七割を占むる第六章運輸營業の章に就て見るに、運賃學說をば旅客運賃及貨物運賃の說明の前に置かずして、先づ旅客運賃を說明し次に貨物運賃の說明に入るの前提として之を說くといふ結構上の可否の問題は措くとするも、「運送實費は運賃の適切正確なる基礎とはならぬけれども運賃の最低限度を定めるの實益がある」（一六四―五頁）といふその運送實費なるものは平均實費の意かそれとも追加實費の意か分らぬ。負擔力說の說明に於て「負擔し得」とは貨客の堪え得るだけの賃金を徵收するの意となせるは（一六六頁）却て負擔し得る總てを徵收するの意と誤解せらるゝの恐れなきか。折衷說を說くに當りその（二）に於て「價格の低廉なる原料品若くは粗製品の如きは實費說を標準とし……その負擔に堪え得るが如き低廉なる運賃を制定」すべしと（一六八―九頁）云つて居られるが、原料品の如きは精製品よりも却て實費を要すること多く從つて實費主義によればその運賃は負擔に堪えざるの場合寧ろ多からざるか、從つてその（四）に於て「運賃は原則として實費以下に低減すべからず」（一六九頁）と云つて居られる所は運賃收入の總額は運送費用の總額を償ふ程度以上に在らしむべし」と改むるの要なきか、等の疑問も生ずる。（猶、理論に關するものではないが、「千八百三十九年米國のマディソン・インディアナポリス鐵道にて行はれたる旅

客運送狀は記名式にして旅客の氏名座席、番號發着驛名及賃金を記入し云々」とある（一〇八頁）「座席、番號」は「座席の數」と改むべきものである）。

斯の如く本書は理論に於ては讀む者をして幾多の疑義を挾ましむるの餘地を存して居るけれども、本邦鐵道が如何に運營せられて居るかの實際問題に至つては流石專門家だけに十二分の說明を與へて居る。評者は此の後者の點に於てだけでも鐵道に關する邦文參考書の少ない折柄此の書の公刋を喜ぶものである。（增井幸雄）

前號（第十四卷第十二號）目次（大正九年十二月號）

論說

◉アリストーテリズの奴隷制度論　高橋誠一郎
◉續契約解除論（五、完）　神戶寅次郎
◉フイヒテの經濟觀（下）　阿部秀助
◉株式會社發起人論（四、完）　西本辰之助

雜錄

◉勞農露國の勞働組合　堀江歸一
◉革新文學の佛國大革命に及ぼしたる影響　占部百太郎
◉社會保險の賃銀に及ぼす影響（下）　園乾治
◉銀行の支拂承諾の內容に就て　三宅嘉十郎
◉古代法に現れたる家族制　野村兼太郎

新刊紹介

◉德富蘇峯著「大戰後の世界と日本」　田中萃一郎
◉ベーア版「ロバアト・オーエン自傳」　加田忠臣
◉落合昌太郎著「社會生活學」　小泉信三

附錄

◉理財學會記事

◉一冊定價金五拾錢
◉半ヶ年分金貳圓九拾錢
◉一ヶ年分金五圓四拾錢
郵稅金壹錢五厘
郵稅共

◉編輯及び事務に關する一切の用件は發行所宛
◉營業に關する用件は發賣元宛
◉原稿締切期日は發行の前月十日限

大正九年十二月廿一日印刷納本
大正十年一月一日發行
每月一回一日發行

三田學會雜誌
禁轉載
第十五卷第一號

東京市芝區三田二丁目二番地慶應義塾內
編輯兼發行者　江田範保
東京市赤坂區新町五丁目四十二番地
印刷者　金子鐵五郎
東京市赤坂區新町五丁目四十二番地
印刷所　金子活版所

東京市神田區表神保町三番地
發賣元　株式會社　東京堂書店
電話神田 長三〇番 六〇番 三〇六一番 三〇六二番 三〇六三番 三〇六四番 三〇六五番 三〇六六番
振替東京 二七〇番

◉尙は本誌は全國各市雜誌店にて販賣す

東京芝三田慶應義塾內
發行所　理財學會